

男女差をみると「買い物」は男性 39.9%、女性 57.2%、また「友人宅」でも男性 5.0%、女性 13.4%、「病院・医院への通院」男性 41.2%、女性 50.5%、「散歩」男性 36.3%、女性 28.0%と差がみられた。それ以外には差はほとんどなかった。

3) 外出手段

次いで外出の方法についてたずねた結果を表 11 に示す。「外出していない」は 2.6%にすぎず、外出方法が一つだけ(回答者別)は「車を運転」は 13.1%、次いで「歩いていく」は

10.1%であった。

男女差をみると「車を運転」のみは男性 26.8%、女性 4.8%と男性が多く、それに対し「家族の車で」でのみも男性 3.6%、女性 13.0%と差がみられた。それ以外には差はほとんどなかった。

次に項目別(合計は100%以上)でみると、「歩いていく」が最も多く 42.9%、次いで「自転車」が 29.1%、「家族の車」28.3%であった。男女差をみると「歩いていく」は男性 38.2%、女性 45.7%、また「車を運転」でも

表 11 外出する際の方法として多いのはどれですか? : 現在

	回答者別			項目別		
	男	女	計	男	女	計
外出していない	31名 2.3%	63名 2.9%	94名 2.6%	31名 2.3%	63名 2.9%	94名 2.6%
歩いていく	95 7.0%	263 11.9%	358 10.1%	517 38.2%	1010 45.7%	1527 42.9%
自転車	102 7.5%	207 9.4%	309 8.7%	417 30.8%	619 28.0%	1036 29.1%
家族の車で	49 3.6%	288 13.0%	337 9.5%	170 12.6%	839 38.0%	1009 28.3%
車を運転	362 26.8%	105 4.8%	467 13.1%	707 52.3%	162 7.3%	869 24.4%
公共交通機関(バス・電車)	22 1.6%	80 3.6%	102 2.9%	224 16.6%	608 27.5%	832 23.4%
タクシー	13 1.0%	22 1.0%	35 1.0%	65 4.8%	262 11.9%	327 9.2%
バイク	28 2.1%	21 1.0%	49 1.4%	70 5.2%	46 2.1%	116 3.3%
車いす	2 0.1%	5 0.2%	7 0.2%	6 0.4%	14 0.6%	20 0.6%
電動三輪車	2 0.1%	7 0.3%	9 0.3%	7 0.5%	12 0.5%	19 0.5%
その他	2 0.1%	16 0.7%	18 0.5%	11 0.8%	61 2.8%	72 2.0%
複数回答	616 45.6%	1052 47.6%	1668 46.9%			
返答なし	28 2.1%	79 3.6%	107 3.0%			
計	1352 100%	2208 100%	3560 100%	2225 164.6%	3696 167.4%	5921 166.3%

男性 52.3%、女性 7.3%、また「家族の車で」でも男性 12.6%、女性 38.0%、また「公共交通機関（バス・電車）」でも男性 16.6%、女性 27.5%、また「タクシー」でも男性 4.8%、女性 11.9%と差がみられた。それ以外には差はほとんどなかった。

まずもっとも目を引くのは「車を運転」であり、男性では 52.3%と半数以上にのぼり、女性での 7.3%と大きな差があるが、自転車では男女共に約 3 割とほぼ同じであった。

しかし外出手段として「歩いていく」人は男女共に半数以下であった。また「家族の車で」は女性に多かった。

II. 「参加」の状況

1. 家庭内の役割（全体）

1) 家庭内役割（家事、庭いじりなど）

家庭内役割（家事、庭いじりなど）の状況は表 12 に示すように、「前からしていなかった」は 11.9%、「今はしていない」は 10.4%であった。これに対し「問題なくしている」は 55.1%と半数以上、「難しいがしている」は 16.4%と、両者をあわせて約 7 割であった。

家庭内役割は男女差が多いことが予想される項目であるが、男女差をみると「前からしていなかった」は男性 19.6%、女性 7.2%、また「難しいがしている」でも男性 12.2%、女性 19.0%と差がみられた。それ以外には差はほとんどなかった。

「難しいがしている」人が男性 1 割強、女性約 2 割であったことから、家事行為に対する活動向上訓練の必要性を考慮することが介護予防としての在宅自立支援として重要と考えられる。

表 12 家庭での役割家事、庭いじりなど

	男	女	計
前からしていなかった	265 名 19.6%	159 名 7.2%	424 名 11.9%
問題なくしている	728 53.8%	1235 55.9%	1963 55.1%
難しいがしている	165 12.2%	420 19.0%	585 16.4%
今はしていない	124 9.2%	245 11.1%	369 10.4%
返答なし	70 5.2%	149 6.7%	219 6.2%
計	1352 100%	2208 100%	3560 100%

2) 家庭内役割の状況

家庭内役割の状況は表 13 に示すように、「特になし」は男女計で 19.2%であったが、男性で 3 割、女性で 1 割強と男女差は著しかった。一方項目別にみていくと「家事全て自分」は男女計で 25.7%、男性約 1 割弱、女性 3.5 割と女性が多かった、「家事自分が主だが時に手伝いもあり」は計で 11.1%でも女性が多かった。「家事一部だけ」は約 3 割、「庭いじり」は 2.5 割とほとんど差はなかった。

なお男性が概して家事への参加が少ないのは事実であるが、それでも 1 割弱が家事を「家事全て」と答えており、「家事自分だが時々手伝いもあり」「家事一部だけ」を加えると半数近くになることは忘れてはならないことである。

3) 家庭内役割等の家の中のことでこの 1 年間でしなくなったこと

表 14 に示すように家庭内役割等の家の中のことでこの 1 年間でしなくなったことしなくなったことが、「なし」は 65.9%、「あり」は 17.9%であった。

男女差をみると「なし」は男性、「あり」は女性の方が多かった。

表 13 家庭内の自分の役割

	回答者別			項目別		
	男	女	計	男	女	計
特にない	406名 30.0%	279名 12.6%	685名 19.2%	406名 30.0%	279名 12.6%	685名 19.2%
家事全て自分	110 8.1%	622 28.2%	732 20.6%	121 8.9%	795 36.0%	916 25.7%
家事自分が注力する時に手伝いもあり	68 5.0%	218 9.9%	286 8.0%	91 6.7%	304 13.8%	395 11.1%
家事一部だけ	242 17.9%	398 18.0%	640 18.0%	400 29.6%	592 26.8%	992 27.9%
庭いじり	182 13.5%	117 5.3%	299 8.4%	372 27.5%	545 24.7%	917 25.8%
その他	91 6.7%	63 2.9%	154 4.3%	152 11.2%	135 6.1%	287 8.1%
複数回答	215 15.9%	463 21.0%	678 19.0%	%	%	%
返答なし	38 2.8%	48 2.2%	86 2.4%	%	%	%
計	1352 100%	2208 100%	3560 100%	1542 114.1%	2650 120.0%	4192 117.8%

表 14 家の中のことで、この1年間で、しなくなったこと

	男	女	計
なし	945名 69.9%	1400名 63.4%	2345名 65.9%
あり	168 12.4%	470 21.3%	638 17.9%
返答なし	239 17.7%	338 15.3%	577 16.2%
計	1352 100%	2208 100%	3560 100%

4) 家庭内の役割が変化した場合の理由

では、家庭内の役割が変化した理由をみると表 15 に示すように、「疲れやすい」は 10.9% と最も多く、「他の家族がしてくれる」は 9.0%、「家事の動作が難しくなった」は 3.7%、「その他」は 3.9% であった。「他の家族がしてくれる」という環境因子の影響が「家事の動作が難しくなった」という活動の影響よりも多かった。

表 15 しなくなった理由

	男	女	計
疲れやすい	134 9.9%	254 11.5%	388 10.9%
他の家族がしてくれる	112名 8.3%	209名 9.5%	321名 9.0%
家事の動作が難しくなった	29 2.1%	101 4.6%	130 3.7%
その他	47 3.5%	92 4.2%	139 3.9%
複数回答	33 2.4%	98 4.4%	131 3.7%
しなくなったことなし	945 69.9%	1400 63.4%	2345 65.9%
返答なし	52 3.8%	54 2.4%	106 3.0%
計	1352 100%	2208 100%	3560 100%

2. 家族・親戚・友人などとの交流

家族・親戚・友人などとの交流について表 16 に示すように交流が「多い」が 33.1%、「時々交流している」は 55.4%、「ほとんどない」は 8.8% であった。

これらはほとんど男女差はなかった。

表 16 家族・親戚・友人などとの交流

	男	女	計
多い	408名 30.2%	772名 35.0%	1180名 33.1%
時々交流している	754 55.8%	1218 55.2%	1972 55.4%
ほとんどない	157 11.6%	155 7.0%	312 8.8%
返答なし	33 2.4%	63 2.9%	96 2.7%
計	1352 100%	2208 100%	3560 100%

3. 仕事

仕事については表 17 に示すように、「仕事をしたいがしていない」は 16.9%、「特に仕事をしたいと思わない」は 37.1%であった。これらの男女差はほとんどなかった。この 2 者の合計は男性で 52.5%、女性で 55.0%であった。逆にこれ以外の人々（返答なしを除く）、すなわち男性の 35.9%、女性の 25.5%が何らかの仕事（家事およびそれ以外の家の中の仕事を除く）についていることになる。

内訳をみると、「常勤の一般の仕事（自営業含む）」は 11.0%、「パート勤務」は 1.2%、「ボランティア的な仕事」は 3.2%、「その他」13.3%であった。男女差をみると「常勤の一般の仕事（自営業含む）」は男性 15.4%、女性 8.3%と差がみられた。それ以外には差はほとんどなかった。

この他に「複数回答」が各群の 0.4~1.3%にみられた。

4. 趣味・スポーツ

趣味・スポーツについては表 18 に示すように、「もともと興味がない」は 26.8%、「十分

表 17 仕事

	男	女	計
仕事をしたいがしていない	248名 18.3%	355名 16.1%	603名 16.9%
特に仕事をしたいと思わない	463 34.2%	858 38.9%	1321 37.1%
常勤の一般の仕事含む：自営業	208 15.4%	184 8.3%	392 11.0%
パート勤務	23 1.7%	20 0.9%	43 1.2%
ボランティア的な仕事	57 4.2%	57 2.6%	114 3.2%
その他	179 13.2%	294 13.3%	473 13.3%
複数回答	17 1.3%	9 0.4%	26 0.7%
返答なし	157 11.6%	431 19.5%	588 16.5%
計	1352 100%	2208 100%	3560 100%

にしている」は 8.9%、「ある程度している」は 34.0%、「したいができない」は 14.2%であった。

男女差をみると「ある程度している」は男性 39.2%、女性 30.8%と差がみられた。それ以外には差はほとんどなかった。

以上をまとめると、趣味・スポーツの参加者（「ある程度している」と「十分にしている」を加えたもの）は男性では約 5 割、女性では約 4 割であった。これは大まかにいって一般高齢者の半数前後が、性別・年齢層別にかかわらず、趣味・スポーツに参加していることである。

「したいができない」人が 1.5 割おり、この理由としては近くに趣味・スポーツをする場所や仲間がないことが最も多かった。廃用症候群を予防・改善する生活の活発化の点で趣味・スポーツを行なうことは効果的であり、この観点からの地域の活性化が望まれるところである。

表 18 趣味・スポーツ

	男	女	計
もともと興味がない	326名 24.1%	629名 28.5%	955名 26.8%
十分にしている	145 10.7%	172 7.8%	317 8.9%
ある程度している	530 39.2%	681 30.8%	1211 34.0%
しげいができない	188 13.9%	317 14.4%	505 14.2%
返答なし	163 12.1%	409 18.5%	572 16.1%
計	1352 100%	2208 100%	3560 100%

IV. 「心身機能」の状況

1. 体や心の不自由なところ

体や心の働きの不自由なところについて聞くと、表 19 に示すように、「特になし」は 47.9%と約半数いた。

男女差をみると「特になし」は男性 53.3%、女性 44.7%と僅かながら差がみられた。それ以外には差はほとんどなかった。

不自由なところが一つだけ（回答者別）は「足の動き」が最も多く 9.7%、次いで「音を聞くこと」は 6.2%であった。

表 19 体や心の働きの不自由

	回答者別			項目別		
	男	女	計	男	女	計
特になし	721名 53.3%	986名 44.7%	1707名 47.9%	721名 53.3%	986名 44.7%	1707名 47.9%
足の動き	99 7.3%	248 11.2%	347 9.7%	255 18.9%	583 26.4%	838 23.5%
音を聞くこと	92 6.8%	127 5.8%	219 6.2%	223 16.5%	334 15.1%	557 15.6%
ものを見ること	29 2.1%	57 2.6%	86 2.4%	136 10.1%	244 11.1%	380 10.7%
手の動き	22 1.6%	28 1.3%	50 1.4%	102 7.5%	204 9.2%	306 8.6%
失禁	5 0.4%	24 1.1%	29 0.8%	36 2.7%	117 5.3%	153 4.3%
その他	17 1.3%	47 2.1%	64 1.8%	37 2.7%	95 4.3%	132 3.7%
認知症	10 0.7%	19 0.9%	29 0.8%	42 3.1%	73 3.3%	115 3.2%
声を出して話すこと	8 0.6%	16 0.7%	24 0.7%	41 3.0%	59 2.7%	100 2.8%
意識障害	2 0.1%	0 0.0%	2 0.1%	10 0.7%	18 0.8%	28 0.8%
複数回答	236 17.5%	422 19.1%	658 18.5%			
返答なし	111 8.2%	234 10.6%	345 9.7%			
計	1352 100%	2208 100%	3560 100%	1603 118.6%	2713 122.9%	4316 121.2%

項目別（合計は 100%以上）にみると「足の動き」が 23.5%と最も多く、次いで「音を聞くこと」が 15.6%、「ものを見ること」が 10.7%であった。

男女差をみると「特になし」は男性 53.3%、女性 44.7%、また「足の動き」でも男性 18.9%、女性 26.4%と差がみられた。それ以外には差はほとんどなかった。

2. 歩行困難

1) 歩行困難の状況

歩くのに難しさを感じるかについては表 20 に示すように、「なし」は全体で 44.2%、

男性 55.0%、女性 37.5%、また「あり」が全体で 51.8%、男性 42.1%、女性 57.7%と男女差があり、女性で「あり」が多かった。

表 20 歩行困難

	男	女	計
なし	744 名 55.0%	829 名 37.5%	1573 名 44.2%
あり	569 42.1%	1275 57.7%	1844 51.8%
返答なし	39 2.9%	104 4.7%	143 4.0%
計	1352 100%	2208 100%	3560 100%

表 21 歩くのが難しい理由

	回答者別			項目別		
	男	女	計	男	女	計
足が力がおちた	54 名 4.0%	84 名 3.8%	138 名 3.9%	229 名 16.9%	431 名 19.5%	660 名 18.5%
足の関節の痛み	45 3.3%	131 5.9%	176 4.9%	143 10.6%	443 20.1%	586 16.5%
歩く速度が遅い	30 2.2%	58 2.6%	88 2.5%	153 11.3%	370 16.8%	523 14.7%
腰痛	33 2.4%	69 3.1%	102 2.9%	131 9.7%	371 16.8%	502 14.1%
疲れやすい	39 2.9%	73 3.3%	112 3.1%	147 10.9%	313 14.2%	460 12.9%
つまづき易い	12 0.9%	31 1.4%	43 1.2%	113 8.4%	274 12.4%	387 10.9%
耳が聞こえにくい	7 0.5%	22 1.0%	29 0.8%	77 5.7%	165 7.5%	242 6.8%
ふらつく	10 0.7%	10 0.5%	20 0.6%	75 5.5%	153 6.9%	228 6.4%
目が見えにくい	3 0.2%	8 0.4%	11 0.3%	42 3.1%	114 5.2%	156 4.4%
その他	11 0.8%	14 0.6%	25 0.7%	22 1.6%	37 1.7%	59 1.7%
複数回答	295 21.8%	648 29.3%	943 26.5%	%	%	%
返答なし	813 60.1%	1060 48.0%	1873 52.6%	%	%	%
計	1352 100%	2208 100%	3560 100%	1132 83.7%	2671 121.0%	3803 106.8%

2) 歩行困難の理由

歩くのが難しい理由は表 21 に示すように、理由が一つだけの人では「足の関節の痛み」が最も多く 4.9%、次いで「足の力がおちた」が 3.9%であった。

項目別にみると「足の力がおちた」が 18.5%、「足の関節の痛みは」が 16.5%、「歩くはやさが遅い」が 14.7%、「腰痛」が 14.1%、「疲れやすい」 12.9%であった。

項目別の男女差をみると「足の関節の痛み」は男性 10.6%、女性 20.1%、「歩く速さが遅い」でも男性 11.3%、女性 16.8%、「腰痛」は男性 9.7%、女性 16.8%と差がみられた。それ以外には差はほとんどなかった。

従来あまり指摘されなかったことであるが、「耳が聞こえにくい」ことが歩くのが難しい原因となっている人が 6.8%、「目が見えにくい」ための人が 4.4%であったことは注目すべきことである。

V. 「健康状態」の状況

1. 通院

1) 通院の状況

現在における病院・医院への通院状況は表 22 に示すように、「あり」(通院中) 69.7%と 7 割は通院しており、男女差はほとんどなかった。

表 22 現在の病院・医院への通院

	男	女	計
あり	931 68.9%	1550 70.2%	2481 69.7%
なし	362名 26.8%	507名 23.0%	869名 24.4%
返答なし	59 4.4%	151 6.8%	210 5.9%
計	1352 100%	2208 100%	3560 100%

2) 入院

入院の状況については表 23 に示すように、「これまで一度もない」は 38.8%と 4 割弱であったが、「1年以内にあり」は 10.9%、「5年以内にあり」は 17.5%、「最近5年間はない(が入院歴あり)」は 24.2%であった。

男女差をみると「1年以内にあり」が男性 14.3%、女性 8.9%と男性で多く、「これまで一度もない」は男性 34.8%、女性 41.3%と差がみられた。それ以外には差はほとんどなかった。

表 23 これまでの入院歴

	男	女	計
これまで一度もない	471名 34.8%	912名 41.3%	1383名 38.8%
1年以内にあり	193 14.3%	196 8.9%	389 10.9%
5年以内にあり	273 20.2%	350 15.9%	623 17.5%
最近5年間はない	327 24.2%	536 24.3%	863 24.2%
返答なし	88 6.5%	214 9.7%	302 8.5%
計	1352 100%	2208 100%	3560 100%

V. 環境因子の状況

1. 人的環境

1) 同居家族

同居家族の状況は表 24 に示すように、「一人暮らし」は 14.7%、「配偶者と 2 人暮らし」は 27.5%、「その他」は 55.7%であった。

男女差をみると「一人暮らし」は男性 6.9%、女性 19.6%と女性に多く、また「配偶者と 2 人暮らし」は男性 42.3%、女性 18.5%、また「その他」では男性 49.5%、女性 59.6%と差がみられた。それ以外には差はほとんどなかった。

以上から「一人暮らし」は女性に多く、「配偶者と二人暮らし」は男性に多い傾向がうかがえた。

表 24 同居家族

	男	女	計
一人暮らし	93名 6.9%	432名 19.6%	525名 14.7%
配偶者と2人暮らし	572 42.3%	408 18.5%	980 27.5%
その他	669 49.5%	1315 59.6%	1984 55.7%
返答なし	18 1.3%	53 2.4%	71 2.0%
計	1352 100%	2208 100%	3560 100%

2) 昼間自宅にいる家族

昼間自宅に、家族の方が居るかについては表 25 に示すように、「ほとんど誰かいる」は 46.6%、「半分位は誰かいる」は 25.4%、「ほとんどいない」は 24.6%であった。

男女差をみると「ほとんど誰かいる」は男性 58.5%、女性 39.3%、また「ほとんどいない」でも男性 14.2%、女性 31.0%と差がみられた。それ以外には差はほとんどなかった。

以上から高齢者全体の約 7 割は「ほとんど」あるいは「半分くらいは」誰かがいる状態にあり、「ほとんどいない」は 14.2~31.0%であった。

表 25 昼間自宅にいる家族

	男	女	計
ほとんど誰かいる	791名 58.5%	868名 39.3%	1659名 46.6%
半分位は誰かいる	344 25.4%	560 25.4%	904 25.4%
ほとんどいない	192 14.2%	684 31.0%	876 24.6%
返答なし	25 1.8%	96 4.3%	121 3.4%
計	1352 100%	2208 100%	3560 100%

2. 物的環境

1) 歩行補助具の使用状況

① 四点杖

四点杖については表 26 に示すように、「使っていない」は 89.6%、「外出時は時々」は 1.2%、「外出時はいつも」は 0.5%、「家の中」は 0.4%であった。

表 26 四点杖

	男	女	計
使っていない	1234名 91.3%	1957名 88.6%	3191名 89.6%
外出時は時々	13 1.0%	28 1.3%	41 1.2%
外出時はいつも	8 0.6%	11 0.5%	19 0.5%
家の中	3 0.2%	10 0.5%	13 0.4%
複数回答	1 0.1%	0 0.0%	1 0.0%
返答なし	93 6.9%	202 9.1%	295 8.3%
計	1352 100%	2208 100%	3560 100%

② T 字杖 (1 本杖)

T 字杖については表 27 に示すように、「使っていない」は 77.2%、「外出時は時々」は 6.2%、「外出時はいつも」は 5.6%、「家の中」は 0.4%であった。

男女差をみると「使っていない」は男性 83.8%、女性 73.2%と差がみられた。それ以外には差はほとんどなかった。

③ シルバーカー (老人車・手押し車)

シルバーカーについては表 28 に示すように、「使っていない」は 79.5%、「外出時は時々」は 4.5%、「外出時はいつも」は 7.0%であった。

男女差をみると「外出時は時々」でも男性0.9%、女性6.7%、また「外出時はいつも」でも男性1.0%、女性10.6%と差がみられ、明らかに女性に多かった。

表 27 T字杖（1本杖）

	男	女	計
使っていない	1133名 83.8%	1617名 73.2%	2750名 77.2%
外出時は時々	60 4.4%	162 7.3%	222 6.2%
外出時はいつも	58 4.3%	143 6.5%	201 5.6%
家の中	1 0.1%	14 0.6%	15 0.4%
複数回答	5 0.4%	8 0.4%	13 0.4%
返答なし	95 7.0%	264 12.0%	359 10.1%
計	1352 100%	2208 100%	3560 100%

表 28 シルバーカー（老人車・手押し車）

	男	女	計
使っていない	1219名 90.2%	1610名 72.9%	2829名 79.5%
外出時は時々	12 0.9%	147 6.7%	159 4.5%
外出時はいつも	13 1.0%	235 10.6%	248 7.0%
家の中	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
複数回答	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
返答なし	108 8.0%	216 9.8%	324 9.1%
計	1352 100%	2208 100%	3560 100%

④車いす（自分でこぐ）

車いすについては表 29 に示すように、「使っていない」は92.6%、「外出時は時々」は0.3%、「外出時はいつも」は0.4%、「家の中」は0.1%であった。男女差はほとんどな

かった。

表 29 車いすを自分でこいでいるか

	男	女	計
使っていない	1286名 95.1%	2011名 91.1%	3297名 92.6%
外出時は時々	2 0.1%	8 0.4%	10 0.3%
外出時はいつも	0 0.0%	13 0.6%	13 0.4%
家の中	1 0.1%	2 0.1%	3 0.1%
複数回答	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
返答なし	63 4.7%	174 7.9%	237 6.7%
計	1352 100%	2208 100%	3560 100%

⑤車いす（押ししてもらう）

車いすについては表 30 に示すように、「使っていない」は90.8%、「外出時は時々」は0.6%、「外出時はいつも」は0.5%、「家の中」は0.1%であった。男女差は著明でなかった。

表 30 車いすを介助にて使用しているか

	男	女	計
使っていない	1268名 93.8%	1965名 89.0%	3233名 90.8%
外出時は時々	4 0.3%	17 0.8%	21 0.6%
外出時はいつも	5 0.4%	13 0.6%	18 0.5%
家の中	1 0.1%	1 0.0%	2 0.1%
複数回答	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%
返答なし	74 5.5%	212 9.6%	286 8.0%
計	1352 100%	2208 100%	3560 100%

表 31 補装具の使用

	回答者別			項目別		
	男	女	計	男	女	計
補聴器	121名 8.9%	153名 6.9%	274名 7.7%	133名 9.8%	175名 7.9%	308名 8.7%
白杖	22 1.6%	29 1.3%	51 1.4%	28 2.1%	46 2.1%	74 2.1%
装具	5 0.4%	25 1.1%	30 0.8%	6 0.4%	29 1.3%	35 1.0%
義足(切断の場合)	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	1 0.0%	1 0.0%
義手	0 0.0%	1 0.0%	1 0.0%	0 0.0%	1 0.0%	1 0.0%
電動三輪車	5 0.4%	8 0.4%	13 0.4%	8 0.6%	10 0.5%	18 0.5%
しびん	28 2.1%	6 0.3%	34 1.0%	39 2.9%	10 0.5%	49 1.4%
オムツ	19 1.4%	43 1.9%	62 1.7%	32 2.4%	66 3.0%	98 2.8%
ポータブルトイレ	3 0.2%	36 1.6%	39 1.1%	7 0.5%	60 2.7%	67 1.9%
電動車いす	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	2 0.1%	2 0.1%
複数回答	24 1.8%	41 1.9%	65 1.8%	%	%	%
返答なし	1125 83.2%	1866 84.5%	2991 84.0%	%	%	%
計	1352 100%	2208 100%	3560 100%	253 18.7%	400 18.1%	653 18.3%

2) 補装具の使用

補装具等の使用については表 31 に示すように、返答なしが非常に多かったが、項目別で「補聴器」は 8.7%、「白杖」は 2.1%、「装具」は 1.0%、「電動三輪車」は 0.5%、「しびん」は 1.4%、「オムツ」は 2.8%、「ポータブルトイレ」は 1.9%であった。

3) 家の周りの環境

家の周りの環境坂道、交通量が多い、などの問題のために、歩きにくいことはあるかをみると表 32 に示すように、「あり」は

13.8%であった。男女差はほとんどなかった。

表 32 家の周りの環境のために歩きにくいことがあるか

	男	女	計
ある	164 12.1%	329 14.9%	493 13.8%
なし	1079名 79.8%	1630名 73.8%	2709名 76.1%
返答なし	109 8.1%	249 11.3%	358 10.1%
計	1352 100%	2208 100%	3560 100%

D. 総括的考察

個別の項目についての考察はその都度行なってきたので、ここでは全体的な考察を行なう。

まず「活動」の「質」（自立度）についてであるが、「屋外歩行」「自宅内歩行」「階段昇降」「床などからの立ち上がり」などの起居移動行為においても、また日常生活行為（身の回り行為）においても、一応「健康」で「自立」しているとみなされる群でありながら、自立しておらず、行なっていないか、他人の助け（人的介護）を必要とするものが、男女計で最低0.9%（靴下を履かせてもらっている）から最高17.0%（屋外歩行非自立）までの範囲で存在していた。またそこまではいたらないが、「普遍的自立」（日常出会うどのような環境においても問題なく自立している）の状態には達せず、「環境限定型自立」（自宅内とその周辺などの限られた環境のみでは自立している）にとどまっているものが、最低11.1%（自宅内でよく家具や壁を伝わっている）から屋外歩行の48.9%を経て最高64.0%（立って靴下を履くのにもたれてするか、座ってする）という多数に及んでいた。

このことは一応「健康」な後期高齢者においても、少数ながら「活動」が非自立で介護を要するものがあり、さらに「環境限定型自立」ととどまっている、いわば「潜在性生活機能低下者」が少なくないことを示している。この「環境限定型自立」は、種々の原因で廃用症候群（生活不活発病）を起こして明らかな生活機能低下状態となりやすい「ハイリスク群」であることが、他の我々の研究で確認されている。

次に「活動」の「量」を示す生活の活発さについてみると、「1日の活動量」（体の使い方）では「日中も横になっていることが多い」と「ほとんど横になっている」とを加えると男女計で7.3%であり、これに「ほとんどテレビを見ている」を加えると18.8%と2割近くに達する。外出頻度でも「ほとんどない」が8.7%で「週1回」を加えると22.7%に達する。これは特に女性で多く、2者をあわせたものは女性では25.3%と4人に1人の高率となる。

「活動」の「質」と「量」とをいわば「掛け合わせた」ものが「生活の活発性」であり、これが低下することが「生活不活発病」（廃用症候群）の原因であるから、一般後期高齢者においては既に相当な数の人が「生活不活発病」の状態に陥っているか、その直前の「ハイリスク」の状態にあると考えられる。

次に「参加」について見ると、家庭内役割、人との交流、仕事、趣味・スポーツの各項目において「していない」「ほとんどない」とするものは最低8.8%（人との交流）から趣味・スポーツの41.0%をへて最高54.1%（仕事）の高率にいたる。このように「参加」は「活動」以上に低下が著しい。

「心身機能」では5割以上が種々の面の不自由や歩行困難を示していた。

「健康状態」では病院への通院者は約7割で、最近5年間に入院した事のある者は3割弱であった。

「環境因子」としての家族の状況、歩行補助具の使用状況、家の周りの環境についても貴重なデータが得られた。特に「家の周りの環境上の問題のために「歩きにくい」

と感じているものは約 14.0%であった。

E. 結論

1 自治体の在宅非要介護認定後期高齢者（身体障害者手帳を有するものを除く）3,560 名についての調査から、要介護認定を受けていない、一応「健康」であり「自立」しているとされる高齢者においても、活動（屋外歩行、自宅内歩行、身の回り行為、等）にすでにあきらかな制限を受けている者が決して少なくなく、特に活動の「普遍的自立」を達しえず「環境限定型自立」にとどまる者がかなり多いこと、それが概して男性よりも女性に多いことが確認された。また「参加」において一層の低下が認められた。

これは一見健康な高齢者群にも介護予防としての在宅自立支援あるいはリハビリテーションの対象となりうる生活機能低下者や生活機能低下のハイリスク者が意外に多数存在していることを示すものであり、介護予防も含めた在宅自立支援の制度設計のための、また住民自身への普及啓発のための重要な基礎データを得ることができたと考えられる。

在宅生活高齢者の生活機能の実態把握 －要介護認定者－

主任研究者 大川弥生 国立長寿医療センター 研究所 部長
分担研究者 上田 敏 日本障害者リハビリテーション協会 顧問
中村茂美 日本作業療法士協会 常任理事

研究要旨 WHO・ICFモデルに立って、在宅自立支援と、それをめざした病棟・居室棟などの実生活の場でのリハビリテーションのあり方を明らかにする課題にこたえるために、要介護認定者の生活機能の実態を把握し、それを関係者の共通認識とすることを目的として、ICFモデルに基づき「活動」・「参加」に重点をおいて健康状態・背景因子も含めて調査した。同時に環境因子の一部として要介護認定の前後にリハビリテーションサービスを受けたか否か、すなわち「リハビリテーション前置」ならびに事後的なリハビリテーションの現状についても調査した。

対象は1 地方中都市在住の、要介護認定者 8,220 名のうち、要支援・要介護1・要介護2の認定者 4,712 名中、介護保険サービス利用中で入院・入所中を除く 2,921 名であった。回答は 2,150 名（回収率 73.6%）から得た。75 歳未満の 509 名を除いた 1,641 名を分析の対象とした。

その結果、「活動」の自立度（「活動」の「質」）、生活の活発さ（「活動」の「量」）、「参加」のそれぞれの多数の項目において著しい低下がみられ、それが概して要介護度と並行して進行することが確認された。その他「心身機能」「健康状態」「環境因子」にも様々な問題が認められた。特に「リハビリテーション前置」も事後的なリハビリテーションも、量的にも内容面でもきわめて不十分であることが明らかとなった

これにより効果的な病棟・居室棟でのリハビリテーションと在宅自立支援サービス構築のための重要な基礎データを得ることができた。

A. 研究目的

WHO・ICFモデルに立って、在宅自立支援、すなわち在宅の、地域社会とのかかわりをもった質の高い生活（「活動」・人生（「参加」）を実現するための支援と、それをめざし

たりハビリテーション（訓練室中心ではなく、病棟・居室棟における実生活の場での「活動」向上）のあり方を明らかにすることが本研究班の課題である。

それは共に生活機能の上で何らかの問題

(低下)を生じた人についてその向上をはかることである。

これは要介護状態に至ってからでも必要なことであり、要介護状態の進行を防ぎ、可能な限り生活機能の再向上をはかるためのリハビリテーションと在宅自立支援が重要な意味をもつ。そしてそれには関係者全員への共通認識が不可欠である。

そのためには要介護認定者の生活機能の実態を把握し、それを関係者の共通認識とすることが必要である。

しかしながら、現在の要介護認定における認定調査項目は、生活機能の3つのレベルのうち、「心身機能」を主とするものである。また一部調査項目に含まれている「活動」項目も、例えば移動において、車椅子と歩行は全く質的に異なるものでありながら、同一項目として扱っているなど、不十分な点が少なくない。さらに「参加」については項目に全く含まれていない。そこで本調査はこれら活動・参加に重点をおいて、在宅要介護認定者、特に現在ますます増加している後期高齢者のうち、リハビリテーションや在宅自立支援の必要性が高く効果が期待され易い比較的軽度の者について詳しく調査した。

本調査により、現状における要介護認定者の生活機能低下の実態をICFモデルに基づき健康状態・環境因子も含めて把握し、今後のリハビリテーションおよび在宅自立支援の必要度についての共通認識の確立と方策立案に資すると共に、そのような方策の効果を測定するための基準点を設定することを目的とする。

なお、同時に環境因子の一部として要介護認定前の前後にリハビリテーションサービス

を受けたか否か、すなわち「リハビリテーション前置」ならびに事後的なリハビリテーションについての現状の把握をも目的とした。

B. 研究方法

1. 対象

1 地方中都市在住の、比較的軽度の要介護認定をうけ介護保険サービスを利用中の後期高齢者を対象として、生活機能の実態について調査・分析を行った。

対象者は当該市に平成16年10月1日の時点で居住している要介護認定者8,220名のうち、要支援・要介護1・要介護2の認定者4,712名中、介護保険サービス利用中、ただし入院・入所中を除く2,921名であった。

回答は2,150名(回収率73.6%)から得た。75歳未満の509名を除いた1,641名(男性:389名;平均年齢83.6±5.6歳、女性:1,252名;平均年齢84.0±5.3歳)を分析対象とした。

なお、要支援、要介護1・2を対象としたのは調査当時、新予防給付の対象者として想定されていたためである。

2. 調査方法

調査は、介護支援専門員による直接面接法により行った。

調査項目は、WHO・ICFモデルに基づき、生活機能の3つのレベルのうち「活動」「参加」に重点をおき、また健康状態、環境因子について調査した。

「活動」については、自立度(「活動」の「質」と生活の活発さ(「活動」の「量」)の両面から調査した。これは、これら「活動」の「質」と「量」とを「掛け合わせ」たものが全体と

しての「生活の活発性」であり、それが低下することが「生活不活発病」（「廃用症候群」）を引き起こし、生活機能全般の低下に及ぶことがしばしばみられるからである。

（倫理面の配慮）

主任研究者の所属機関の倫理委員会にて審査を受け、研究の承認を受けた。また当該自治体の個人情報保護・管理等の規則に従い、本研究について主任研究者との間で協定書を締結している。

なお対象となる被検者についてはインフォームド・コンセントの原則に立って、実施している

C. 結果と考察

以下、ICF(WHO 国際生活機能分類)のカテゴリー別に「活動」－「参加」－「心身機能」－「健康状態」－「環境因子」の順に述べる。ICF の分類項目(コード)には頭にローマ字1字があり、それに何桁かの数字がつく形をとる。頭のローマ字は上記の順に a－p－b、一つとんで e である。とんだ「健康状態」は ICD<国際疾病分類>に準拠する。各調査項目については相当する ICF コードを付した。

なお、我々の従来の、またこれと並行しておこなった研究においては、実際には非常に多項目について調査していながら、分析と考察においては重複を避ける等の理由から、特に重要と思われる項目を選んで対象とした。しかし今回の研究においては調査した全ての項目について述べることにした。それは要介護認定者の生活機能のできる限り多くの側面を把握することが重要であると考えたからで

ある。

I. 「活動」の状況（1）自立度－「活動」の「質」

「活動」の自立度（活動の質）について代表的な「活動」項目について調査した。

1. 歩行・移動

1) 屋外歩行（a 4602）

調査時点の屋外歩行の状況を要介護度別・男女別にみたものを表 1 に示す。

「遠くへも一人で歩いている」は要支援 431 名中 59 名（13.7%）、「近くであれば一人で歩いている」は 279 名（64.7%）、「誰か一緒であれば歩いている」は 41 名（9.5%）、「外は歩いていない」は 46 名（10.7%）であった。

これに対して要介護 1 の 806 名中「遠くへも一人で歩いている」は 25 名（3.1%）、「近くであれば一人で歩いている」は 392 名（48.6%）、「誰か一緒であれば歩いている」は 138 名（17.1%）、「外は歩いていない」は 229 名（28.4%）であった。

また、要介護 2 の 404 名中では、「遠くへも一人で歩いている」11 名（2.7%）、「近くであれば一人で歩いている」は 93 名（23.0%）、「誰か一緒であれば歩いている」は 117 名（29.0%）、「外は歩いていない」は 173 名（42.8%）であった。

屋外歩行の自立者、すなわち、「遠くへも一人で歩いている」（「普遍的自立」）と「近くであれば一人で歩いている」（「環境限定型自立」）の合計（「自立計」）を要介護度別にみると、要支援 338 名（78.4%）、要介護 1 417 名（51.7%）、要介護 2 104 名（25.7%）であった。

このように屋外歩行自立者の率は、要介護

度が進行するのに並行して低下していた。要支援者における率を基準（100%）として、その他の群と比較すると、要支援（100%）、要介護1（51.7/78.4:65.9%）、要介護2（25.7/78.4:32.8%）と要介護度の進行に伴う低下が明らかである。

ただ、要支援と要介護1との間の落差は「遠くても一人で歩いている」（「普遍的自立」）だけについてみた時の方が著明である。すなわち仮に上記同様の比較をみると、要支援（100%）、要介護1（22.6%）、要介護2（19.7%）となる。

以上から要支援と、要介護1との間で、まず「遠くても一人で歩いている」（「普遍的自立」）が著しく低下し、ついで要介護1と、要介護2との間で、「近くであれば一人で歩いている」（「環境限定型自立」）が低下するという著明な関連性をみてとることができる。

次に男女差をみると、要支援においてのみ、「遠くても一人で歩いている」の率に著しい差があることがわかる（男 21.4%対女 11.8%）。屋外歩行自立者全体（「遠くても一

人で歩いている」と、「近くであれば一人で歩いていける」の合計）では、差は著明でなくなる（男 73.8%対女 79.5%）。要介護1, 2では、このような差は明らかでない。

2) 自宅内歩行（a 4600）

自宅内歩行の状況を表2に示す。

「何もつかまらずに歩いている」（「普遍的自立」に準ずる）は、要支援 431名中 238名（55.2%）、「よく家具や壁を伝わっている」（「環境限定型自立」に準ずる）は、183名（42.5%）、「誰かと一緒に歩いている」は、2名（0.5%）、「ほとんど四つ這いなど」は、3名（0.7%）、「ほとんどベッドや布団の上の生活」は、1名（0.2%）であった。

これに対して要介護1の806名中「何もつかまらずに歩いている」261名（32.4%）、「よく家具や壁を伝わっている」は 485名（60.2%）、「誰かと一緒に歩いている」は10名（1.2%）、「ほとんど四つ這いなど」は 21名（2.6%）、「ほとんどベッドや布団の上の生活」12名（1.5%）であった。

表1 屋外歩行の自立度－要介護度・男女別－

	要支援			要介護1			要介護2			総計
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
遠くへも一人で歩いている	18名 21.4%	41名 11.8%	59名 13.7%	5名 2.6%	20名 3.3%	25名 3.1%	4名 3.5%	7名 2.4%	11名 2.7%	95名 5.8%
近くであれば一人で歩いている	44 52.4%	235 67.7%	279 64.7%	91 47.4%	301 49.0%	392 48.6%	22 19.5%	71 24.4%	93 23.0%	764 46.6%
誰か一緒に歩いている	7 8.3%	34 9.8%	41 9.5%	34 17.7%	104 16.9%	138 17.1%	39 34.5%	78 26.8%	117 29.0%	296 18.0%
外は歩いていない	12 14.3%	34 9.8%	46 10.7%	56 29.2%	173 28.2%	229 28.4%	46 40.7%	127 43.6%	173 42.8%	448 27.3%
返答なし	3 3.6%	3 0.9%	6 1.4%	6 3.1%	16 2.6%	22 2.7%	2 1.8%	8 2.7%	10 2.5%	38 2.3%
計	84 100%	347 100%	431 100%	192 100%	614 100%	806 100%	113 100%	291 100%	404 100%	1641 100%

また、要介護2の404名中では、「何もつかまらずに歩いている」99名(24.5%)、「よく家具や壁を伝わっている」は239名(59.2%)、「誰かと一緒に歩いている」は10名(2.5%)、「ほとんど四つ這いなど」は24名(5.9%)、「ほとんどベッドや布団の上の生活」20名(5.0%)であった。

自宅内歩行の自立者、すなわち、「何もつかまらずに歩いている」と「よく家具や壁を伝わっている」(「自立計」)の合計を要介護別にみると、要支援421名(97.7%)、要介護1 746名(92.6%)、要介護2 338名(83.7%)であった。

これについて屋外歩行の場合と同様に要支援の率を仮に100%として他の群と比較すると、要支援(100%)、要介護1(94.8%)、要介護2(83.7%)となり、大きな差ではない。しかし「何もつかまらずに歩いている」だけについて同様の比較をみると、要支援(100%)、要介護1(58.7%)、要介護2(44.4%)と大きな差が認められる。

すなわち、屋外歩行と異なり自宅内歩行においては、自立全体としての率の低下は、要

介護度とある程度並行はするが、それほど著明でない。ただ、「何もつかまらずに歩いている」という、より高い自立度(「普遍的自立」に準ずる)については、先に屋外歩行でみたと同様の著明な関係をみることができる。

これは要するに、歩行に関連する生活機能の低下は、まず屋外歩行について起り、ついで自宅内歩行に及ぶという、常識的にみても妥当と思われる結果である。ただこの傾向が自立一般でなく、「普遍的自立」に注目する時に一層著明となることは、ICFにおける「活動」評価の基準(「評価点」)の問題とも関連して、非常に興味深いことである。

男女差はどの群においても、明らかではなかった。

3) 階段の昇り降り (a4551)

階段の昇り降りの状況を表3に示す。

「問題はない」は要支援431名中25名(5.8%)、「時々手すりを使用」は48名(11.1%)、「ほとんど手すりを使用」は213名(49.4%)、「昇り降りできない」は35名(8.1%)、「階段の必要がない」は104名(24.1%)であった。

表2 自宅内歩行の自立度—要介護度・男女別—

	要支援			要介護1			要介護2			総計
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
何もつかまらずに歩いている	50名 59.5%	188名 54.2%	238名 55.2%	71名 37.0%	190名 30.9%	261名 32.4%	23名 20.4%	76名 26.1%	99名 24.5%	598名 36.4%
よく家具や壁を伝わっている	32 38.1%	151 43.5%	183 42.5%	106 55.2%	379 61.7%	485 60.2%	72 63.7%	167 57.4%	239 59.2%	907 55.3%
誰かと一緒に歩いている	0 0.0%	2 0.6%	2 0.5%	3 1.6%	7 1.1%	10 1.2%	2 1.8%	8 2.7%	10 2.5%	22 1.3%
ほとんど四つ這いなど	1 1.2%	2 0.6%	3 0.7%	4 2.1%	17 2.8%	21 2.6%	8 7.1%	16 5.5%	24 5.9%	48 2.9%
ほとんどベッドや布団の上の生活	1 1.2%	0 0.0%	1 0.2%	3 1.6%	9 1.5%	12 1.5%	4 3.5%	16 5.5%	20 5.0%	33 2.0%
返答なし	0 0.0%	4 1.2%	4 0.9%	5 2.6%	12 2.0%	17 2.1%	4 3.5%	8 2.7%	12 3.0%	33 2.0%
計	84 100%	347 100%	431 100%	192 100%	614 100%	806 100%	113 100%	291 100%	404 100%	1641 100%

これに対して要介護1の806名中「問題はない」26名(3.2%)、「時々手すりを使用」は56名(6.9%)、「ほとんど手すりを使用」は334名(41.4%)、「昇り降りできない」は143名(17.7%)、「階段の必要がない」236名(29.3%)であった。

また、要介護2の404名中では、「問題はない」7名(1.7%)、「時々手すりを使用」は14名(3.5%)、「ほとんど手すりを使用」は132名(32.7%)、「昇り降りできない」は108名(26.7%)、「階段の必要がない」133名(32.9%)であった。

階段の昇り降りの上位2ランク、すなわち、「問題はない」と「時々手すりを使用」の合計を要介護度別にみると、要支援73名(16.9%)、要介護182名(10.2%)、要介護221名(5.2%)であり、屋外・屋内歩行と比べると全体として著しく困難であることがわかり、またここでも要介護度が進むとともに

に自立度が低下することが明らかであった。

ただ以上の2者に、人的介護を要しない(手すりという物的支援は必要とするが)という意味では一応の自立である「ほとんど手すりを使用」を加え、「一応の自立」全体の比率、しかも「階段の必要がない」を除いた回答中の比率をみると、要支援では286名(66.3%)、要介護1で416名(51.6%)、要介護2では153名(37.9%)と屋内歩行と屋外歩行(共に「自立計」)の中間の値を示す。

4) 畳や床からの立ち上がり (a4104)

畳や床からの立ち上がりの状況を表4に示す。

「不自由はない」は要支援431名中54名(12.5%)、「床や家具に手をついている」は354名(82.1%)、「助けてもらっている」は4名(0.9%)、「行っていない」は14名(3.2%)であった。

表3 階段の昇り降りの自立度－要介護度・男女別－

	要支援			要介護1			要介護2			総計
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
問題はない	9名 10.7%	16名 4.6%	25名 5.8%	10名 5.2%	16名 2.6%	26名 3.2%	2名 1.8%	5名 1.7%	7名 1.7%	58名 3.5%
時々手すりを使用	12 14.3%	36 10.4%	48 11.1%	17 8.9%	39 6.4%	56 6.9%	4 3.5%	10 3.4%	14 3.5%	118 7.2%
ほとんど手すりを使用	41 48.8%	172 49.6%	213 49.4%	73 38.0%	261 42.5%	334 41.4%	37 32.7%	95 32.6%	132 32.7%	679 41.4%
昇り降りできない	5 6.0%	30 8.6%	35 8.1%	35 18.2%	108 17.6%	143 17.7%	34 30.1%	74 25.4%	108 26.7%	286 17.4%
階段の必要がない	17 20.2%	87 25.1%	104 24.1%	56 29.2%	180 29.3%	236 29.3%	33 29.2%	100 34.4%	133 32.9%	473 28.8%
返答なし	0 0.0%	6 1.7%	6 1.4%	1 0.5%	10 1.6%	11 1.4%	3 2.7%	7 2.4%	10 2.5%	27 1.6%
計	84 100%	347 100%	431 100%	192 100%	614 100%	806 100%	113 100%	291 100%	404 100%	1641 100%

これに対して要介護1の806名中「不自由はない」は72名(8.9%)、「床や家具に手をつけている」は617名(76.6%)、「助けてもらっている」は33名(4.1%)、「行っていない」は78名(9.7%)であった。

また、要介護2の404名中では、「不自由はない」31名(7.7%)、「床や家具に手をつけている」は267名(66.1%)、「助けてもらっている」は38名(9.4%)、「行っていない」は60名(14.9%)であった。

畳や床からの立ち上がりの自立者、すなわち、「不自由はない」と「床や家具に手をつけている」の合計を要介護度別にみると、要支援408名(94.7%)、要介護度1 689名(85.5%)、要介護2 298名(73.8%)であった。

ただ「不自由はない」は全体に少なく、要支援54名(12.5%)、要介護1 72名(8.9%)、要介護2 31名(7.7%)にすぎなかった。このように自立者のほとんどが「床や家具に手をつけている」であった。

5) 歩行・移動に関する中間総括

ここで今回調査した歩行・移動に関する各種の活動の相対的な難易度について検討する。

「普遍的自立」と「環境限定型自立」又はそれらに準ずるものを示す上位2ランク(「階段の昇り降り」については上位3ランク)の合計である「自立計」について4つの活動を総計で比較すると、総計1641名のうち、屋外歩行859名(55.7%)、階段は1141名中の855名(74.9%)、床や畳からの立ち上がりは1641名中1395名(85.0%)、屋内歩行が同じく1505名(91.7%)の順となる。要介護度別にみてもこの順位は全く変わらない。

以上から歩行・移動の難易度は「屋外歩行」「階段昇降」「床からの立ち上がり」「屋内歩行」の順であることが確認された。これは横断的データであるが、おそらく縦断的変化である、困難になる順序もおそらくこれと同じと考えてよいであろう。

表4 畳や床からの立ち上がりの自立度－要介護度・男女別－

	要支援			要介護1			要介護2			総計
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
不自由はない	21名 25.0%	33名 9.5%	54名 12.5%	18名 9.4%	54名 8.8%	72名 8.9%	4名 3.5%	27名 9.3%	31名 7.7%	157名 9.6%
床や家具に手をつけている	59 70.2%	295 85.0%	354 82.1%	144 75.0%	473 77.0%	617 76.6%	75 66.4%	192 66.0%	267 66.1%	1238 75.4%
助けてもらっている	2 2.4%	2 0.6%	4 0.9%	15 7.8%	18 2.9%	33 4.1%	15 13.3%	23 7.9%	38 9.4%	75 4.6%
行っていない	2 2.4%	12 3.5%	14 3.2%	14 7.3%	64 10.4%	78 9.7%	16 14.2%	44 15.1%	60 14.9%	152 9.3%
返答なし	0 0.0%	5 1.4%	5 1.2%	1 0.5%	5 0.8%	6 0.7%	3 2.7%	5 1.7%	8 2.0%	19 1.2%
計	84 100%	347 100%	431 100%	192 100%	614 100%	806 100%	113 100%	291 100%	404 100%	1641 100%

2. 日常生活行為（身の回り行為）

1) トイレ（a530）

トイレの状況を表5に示す。

「どこでも（外出先も）」は要支援 431名中 262名（60.8%）、「自宅内：夜も自立」は134名（31.1%）、「自宅内：昼のみ自立」は22名（5.1%）、「一部介助」は5名（1.2%）、「全介助」は1名（0.2%）であった。

これに対して要介護1の806名中「どこでも（外出先も）」332名（41.2%）、「自宅内：夜も自立」は356名（44.2%）、「自宅内：昼のみ自立」は68名（8.4%）、「一部介助」は28名（3.5%）、「全介助」2名（0.2%）であった。

また、要介護2の404名中では、「どこでも（外出先も）」98名（24.3%）、「自宅内：夜も自立」は159名（39.4%）、「自宅内：昼のみ自立」は59名（14.6%）、「一部介助」は67

名（16.6%）、「全介助」は8名（2.0%）であった。

トイレの自立者、すなわち、「どこでも（外出先も）」（「普遍的自立」）と「自宅内：夜も自立」（「環境限定型自立」）の合計（「自立計」）を要介護度別にみると、要支援 396名（91.9%）、要介護1 688名（85.4%）、要介護2 257名（63.6%）であった。

2) 食事（a550）

食事の状況を表6に示す。

「どんな物も可（はし使用、魚の骨とり、等）」は要支援431名中381名（88.4%）、「日常では一人で」は43名（10.0%）、「一部分手伝い」は4名（1.0%）、「全て手伝い」は0名（0.0%）、「非経口」は0名（0.0%）であった。

表5 トイレの自立度－要介護度・男女別－

	要支援			要介護1			要介護2			総計
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	
どこでも （外出先も）	51名 60.7%	211名 60.8%	262名 60.8%	80名 41.7%	252名 41.0%	332名 41.2%	30名 26.5%	68名 23.4%	98名 24.3%	692名 42.2%
自宅内： 夜も自立	25 29.8%	109 31.4%	134 31.1%	77 40.1%	279 45.4%	356 44.2%	38 33.6%	121 41.6%	159 39.4%	649 39.5%
自宅内： 昼のみ自立	7 8.3%	15 4.3%	22 5.1%	19 9.9%	49 8.0%	68 8.4%	20 17.7%	39 13.4%	59 14.6%	149 9.1%
一部介助	1 1.2%	4 1.2%	5 1.2%	13 6.8%	15 2.4%	28 3.5%	20 17.7%	47 16.2%	67 16.6%	100 6.1%
全介助	0 0.0%	1 0.3%	1 0.2%	1 0.5%	1 0.2%	2 0.2%	1 0.9%	7 2.4%	8 2.0%	11 0.7%
その他	0 0.0%	4 1.2%	4 0.9%	1 0.5%	11 1.8%	12 1.5%	1 0.9%	5 1.7%	6 1.5%	22 1.3%
複数回答	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	3 0.5%	3 0.4%	0 0.0%	0 0.0%	0 0.0%	3 0.2%
返答なし	0 0.0%	3 0.9%	3 0.7%	1 0.5%	4 0.7%	5 0.6%	3 2.7%	4 1.4%	7 1.7%	15 0.9%
計	84 100%	347 100%	431 100%	192 100%	614 100%	806 100%	113 100%	291 100%	404 100%	1641 100%